

## 立ちどまる



島 澤 良 子

(藤 間 桂)

“立ちどまる” 美しい言葉である。

たまゆらの心の動きが行動に出て、瞬間のためらい……………。  
そして続く次の思いは、未来への期待か、また来し方への思慕か  
反省か。

“立ちどまる” 美しい響きを持つ日本語である。ただしショックで立ちどまる、赤信号で立ちどまる、この方はひとまず他所へおくことにする。

“立ちどまる” さあ舞踊の世界では？ これは本当に文字通り“立ちどまって”考えてみる。理窟を並べれば現在を確認して次の動きに備える。これが舞踊手の“立ちどまり方”である。決して休止しているのではない。観客が静止したポーズをよく見定めようと身をのり出す、それほどの迫力と美しさのこもった“立ちどまり”の一瞬でなければならない。自分の体は静止しているが観客へ向かって多くを語りかける心を持っているのである。観

客の方ではその舞踊作品と踊り手についてさまざまに心をめぐらし、眼を見開いているのである。それは感動であり、共感、疑問、期待などである。

一つの流れから次の動きに移る一瞬の静止。

同じ流れのなかのアクセント的な静止。この二つでは後者の方がよりむずかしい。そして舞踊手にとって動きの中で止るということは、車にブレーキをかけると同じ余分の力が必要、急に激しく止る時も、静かに止る時も同じこと。外見ではわからないが膝を折って腰を入れる時など息を止め、流れる汗をこらえ耐えているのである。つまり舞踊手側からいえば振付者のこしらえた作品の中に“立ちどまる”と意図された止り方をより効果的に見せるため、動いている時よりもむしろ骨が折れ、自分では止っていることも踊っていることの一つの表現法として受止めているわけである。上手な人ほど、止り方“間”の持たせ方が上手で、止り

方、動き始めがすぐれた効果をあげることはいうまでもない。日本芸能の場合“間”という大切な問題がある。“立ちどまり”をこれと結びつけることもできると思う。しかし歌舞伎舞踊では作品の意図として扱う場合“立ちどまり”は一種の「ためらい」「はずかしさ」という表現になることが多い。かぎりのあるポーズは美しい。しかし現代舞踊、創作舞踊ではこの限りでない。

最後に、“立ちどまり”と解釈できる舞踊について感動した話を二つ。

場所はニューヨーク五番街ブロードウェイで見たすばらしいミュージカルの一場面、それは七、八名の男性舞踊手の群舞、多少コミカルではあるがユニークな振付を、行届いた訓練を受けた舞踊手たちが迫力とスピードをもって踊る。その早いテンポの中で“立ちどまり”的な技法を多く取入れて全員が鮮かに瞬時停止し、また激しく動き出す、息をのむ思いである。この止り方の鮮かさにすっかり感激。舞踊とはその文字が示すように動くこととばかり考えていたが、止ることつまり日本芸能でいわれる“間”という問題がいかに大切であるかを、ニューヨークまで行った日本舞踊家である私がしてやられたと感激した話である。

もう一つ、これは自分のリサイタル作品「雪女」の一場面。しんと降る雪を大勢の踊り手が白い衣装で舞台全体に広がつて

表現している。降りしきり、風に舞い嵐となって荒れ狂い、そして積る積る、各々のグループが複雑にからみ合う、全員猛練習の末、舞台稽古の日を迎える。音楽が響き青白い照明が舞台のつめたさをより効果的に演出する。ガラとした客席の中央で見て下さるのは江口隆哉先生。じつとごらんになった後で、

「雪の精」の群舞、あの踊りの部分を一時ちょっと止めてごらん」とたった一言。

そして本番には荒れ狂う白魔の踊り手たちは、曲の激しい中、一時正面向いて静止した。そして次に風がおさまリ雪が降り止むようにひとりずつ退場と、そんなように手直しした。その結果はわれながら驚くほど、舞台効果があがった。九分間の曲の中でたった二秒の“立ちどまり”がこんな好結果をみるとは。意識的に使った“立ちどまり”ではあるが、私にとって大変な勉強になったことはいうまでもない。創作舞踊界第一人者である江口先生に心から敬意を表すると共に、舞踊を創ること、つまり人生を歩むことはひたむきであればあるほど“立ちどまり”が必要なのではないか。“立ちどまり”ことによって、なお一層前進できるのではないかと考えた。

(うさぎ幼稚園)